湯殿山木食行者鐵門海の活動形態

―盛岡藩領を事例として―

山澤　学

湯殿山木食行者鐵門海の活動形態―盛岡藩領を事例として―

山澤　学

はじめに

小稿は、盛岡藩領（現岩手県北・中部および青森県東部）における湯殿山木食行者鐵門海の活動形態を、弟子門海の活動も視野に入れつつ解明し、一九世紀における出羽三山修験道と地域社会との接触およびその展開過程を見通すことを課題とする。

出羽三山修験道の牽引者である鐵門海は、出羽三山の奥院とされる湯殿山において山籠修行し、東日本一帯に広がる多くの信者に帰依された後に、即身仏となった行人である。現代においてもなお、彼自身が即身仏として信仰を集めている。筆者[1]は、歴史学の立場から、この鐵門海の相貌が後世の縁起から描かれてきたことに違和感をもち、鐵門海が活動した同時代の史料に記録されるその実像を重視し、考察してきた。その結果、湯殿山表口別当注連寺の一世行人として登場するものの、木食行者と自称し、湯殿山を核とする新たな出羽三山修験道を確立したことを明らかにした。彼に帰依した信者・講中は、従来の町・村を単位としたものばかりではなく広域的に拡がり、武家や、町人・百姓の新興勢力と取り結ぶことにより成ったものもあり、近世後期における特徴的な宗教者と考える。

筆者は、信仰圏の中央部というよりはむしろ縁辺部に注目してきたが、小稿では陸奥国南部地方、すなわち盛岡藩領を研究対象地域とする。盛岡藩領における鐵門海の活動については、従来は自治体史においてすら取り上げられることが少なく、研究はその名を刻む湯殿山供養塔の事例報告[2]、領内の行人寺の再興記録の紹介[3]などに留まっており、等閑視されてきた地域といえる。その活動の形態を明らかにするうえでも、さらにはその後に近代へと移行する出羽三山修験道の展開過程を究明するうえでも、重要と考えられる。

以上の観点から、小稿では、盛岡藩領における鐵門海による湯殿山行人寺再興の実際、ならびに鐵門海の名を刻む湯殿山供養塔の分布・銘文を検討する。さらには、鐵門海の弟子門海による関口不動尊（現下閉伊郡山田町）の再興過程と特徴を検討し、門海に継承されたと見られる鐵門海の活動の特徴も考察対象とする。これらにより、鐵門海の布教活動の特徴を解明し、ひいては鐵門海・門海のもとに集結した人々が有した歴史的な意味を見通していくことを目指す。

なお、鐵門海は、鉄門海とも表記され、また、文化一四年（一八一七）六月に門跡寺院である京都御室の仁和寺から上人号を授与された後には鐵門上人（鉄門上人）を自称するが、小稿では、史料からの引用を除き、鐵門海と表記する。また、小稿で述べる鐵門海の実像は、縁起・由緒上の人物像と異なるが、それに基づく信仰を否定するものではない。

第一節　盛岡金剛珠院・連正寺の創立伝承

湯殿山麓下に暮らした郷土史家である渡部留治[4]は、山形県酒田市日吉町二丁目（旧下台町）の海向寺の再建をはじめ、同県鶴岡市砂田町（銀町より移転）の南岳寺、同市狩川字山崎の西光寺、岩手県盛岡市内丸の金剛珠院、同市南大通二丁目の連正寺などがすべて鐵門海の建立したもので、今も信仰の場として栄えていると説いた。以後の研究では、しばしばこの見解が引用されてきた。まず、旧盛岡藩領に所在する金剛珠院・連正寺の創立伝承の考察を通じ、鐵門海の来盛を明らかにする。

金剛珠院・連正寺はいずれも、鐵門海の即身仏が安置される湯殿山表口別当注連寺の末寺である。それぞれの縁起[5]は以下の通りである。

金剛珠院は、山号を湯殿山と言い、金胎両部大日如来を本尊とする湯殿山祈禱所で、「内丸のお湯殿山」と通称される。明治初年に、後に同院第一世となる佐藤長全、第二世となる清岳が盛岡および紫波・岩手・稗貫を巡錫、加持祈禱しつつ講中を編成した。長全・清岳は、注連寺内において旧盛岡藩領からの講中・参詣者を案内する三山先達役であった。長全は、明治六年（一八七三）に大手先東側の四戸孫四郎武虎屋敷跡の北角の地を借用し、仮仏堂を建立した。同一三年（一八八〇）旧四月には二世清岳が大手先西側の南部弥六郎屋敷跡の一部に本堂・庫裏を建立して移転し、本尊を注連寺から迎え入れ、金剛珠院が創立された。ただし、その「礎」は、文政三年（一八二〇）に来盛して布教に努め、苦難を除いて人々を善導した鐵門海にあるとし、鐵門海が入定した一二月八日は御縁日とされ、護摩祈禱が執行される。

ついで連正寺は、寺の下と呼ばれる城下南口の惣門付近に並び立つ寺院群の中にある。山号は金剛珠院と同じく湯殿山で、大日如来を本尊とする。この本尊は、本寺注連寺から譲り渡されたもので、同寺境内にあり空海が七五三（注連）をかけたと伝えられる七五三掛桜（初代）の木から彫り出されたものとされる。開山は、かつて門竜海法印和尚とされていたが[6]、近年は文政三年に来盛して布教した「鉄門海上人」と改められている。連正寺は、門竜海が明治一二年（一八七九）に五間四面の本堂を建立し、翌一三年四月に開基された。この本堂は、明治一七年（一八八四）に大火にあい、類焼したという。

以上のように、両寺院はともに、歴世を見る限りでは明治一二年および一三年に新たに創立された寺院であるが、鐵門海を開山や「礎」に位置づけている。その創立時期は、管見の限り、江戸時代盛岡の城下町絵図・史料に両寺が見えないことからも、妥当性がある。本章冒頭に掲げた渡部の見解は、正確さを欠くと言わざるを得ない。

両寺院を建立したのは鐵門海ではなく、注連寺から派遣された長全・清岳・門竜海である。彼らが来盛した理由は、幕末維新期に混乱した、旧盛岡藩領の講中を再編成するためであった。鐵門海は、その「礎」というのであるから、これに先立つ信者・講中の編成に寄与していたことを予想させられる。

しかも、鐵門海の来盛が、文政三年という具体的な年紀をともなって記憶されていることには注意を要する。直接的にこれを確認できる史料は見受けられない。ただし、旧盛岡藩領にあたる下閉伊郡山田町北浜町（釜谷洞）に建つ湯殿山供養塔に、この年紀が陰刻されているのである。この塔は本体のみで高さが一七二センチメートルあり、その銘文は次の通りである[7]。

（正面）　　（背面）

（アーンク）　湯殿山　　恵眼院　鐵門上人　郷中安全　　文政三庚辰年　十一月吉日

筆者がこれまで調査した経験では、山形・新潟県内における同様の供養塔は、鐵門海が実際に布教し祈禱した宗教実践の場に建てられた事例が多く、その場合、その地域で鐵門海に帰依した人々によって鐵門海が布教したさいの年月が刻まれている[8]。それらの事例に学ぶならば、鐵門海は、文政三年一一月に山田の地を訪れて祈禱したことになる。したがって、鐵門海は、その前後に、その途次にある盛岡に到来し、布教し

ていた可能性が高く、それが金剛珠院・連正寺を創立した人々にも記憶されていたと見ることができる。

第二節　鐵門海による行人派寺院の再興

次に、鐵門海が盛岡藩領へ到来する以前の、同領内における湯殿山行人の動向を検討し、それらの行人派寺院と鐵門海の関係を考察する。

盛岡藩領には、出羽三山修験道の担い手として、天台系の羽黒山の末派である羽黒派の修験が広く存在していたことが知られている。しかも、羽黒派は本山派と争うほど大きな勢力であった[9]。

しかし、領内には、真言系の湯殿山行人で、注連寺の末流にある行人派の寺院も存在していた。これは羽黒派と比べれば、明らかに少数派であった。文化一四年（一八一七）から天保一〇年（一八三九）に市原篤焉が盛岡藩の諸記録から編んだ「篤焉家訓」巻一二、寺院之巻[10]には領内における寺院本末関係の書上が収められている。これには、注連寺末の行人派寺院（以下、行人寺と称する）が一六か寺書き上げられている（表1）。

その筆頭には、行人触頭として、盛岡城下、八幡片原町北端に所在した明王院が挙げられている。明王院については、星川

表1　盛岡藩領の湯殿山行人寺

No.	行人寺	山号・寺号	郡名	通名	町・村名	現行市町村名
1	明王院	威曜山不動寺	岩手		盛岡八幡片原町	盛岡市
2	正蓮寺	法竜山	紫波	日　詰	郡山下町	紫波町
3	自性院	滝川山	稗貫	万丁目	花巻四日町	花巻市
4	雲樹庵		和賀	二　子	二子村	北上市
5	精光庵		稗貫	寺　林	糠塚村	花巻市
6	柳光庵		和賀	鬼　柳	鬼柳村	北上市
7	林宮庵		稗貫	寺　林	宮ノ目村	花巻市
8	宝樹庵		稗貫	寺　林	北湯口村	花巻市
9	正乗院	愛宕山	岩手	沼宮内	川口村	岩手町
10	来福院	伊徳山	三戸	五　戸	浅水村	青森県五戸町
11	浄行庵		北	七　戸	天満館村	青森県七戸町
12	慈海		北	野辺地	有戸村（帰命村）	青森県野辺地町
13	正王院	雪光山	北	田名部	川内村	青森県むつ市
14	忠照院	宝亀山	閉伊	野　田	岩泉村	岩泉町
15	法徳庵		二戸	福　岡	浄法寺村	二戸市
16	万福寺	栄貴山	紫波	飯　岡	飯岡村	盛岡市

註　本文註（10）青森県史編さん近世部会編著書、（9）森著書ほかにより作成。
No.は図1中の数字に対応する。
なお、八戸藩領の城地八戸の常海町には万福寺（注連寺末）がある（明治3年「諸宗本末・寺号其外明細牒（八戸藩）」、社寺取調類纂）。

正甫が明治七年（一八七四）五月に天保四年（一八三三）一〇月「盛岡砂子温故名跡誌」を改訂して編んだという「盛岡砂子」[11]巻四の城東に関する記事中に、次のように記されている。

威曜山不動寺明王院

乗留、北羽州湯殿山信蓮[注連]寺末。此境内に虚桜[うそさくら]とて、幾年を経てうろになりしか、此木の皮を削て焼は、香薫して沈香の匂ひの如しと云、文化の頃迄は、皮計りの虚にも春毎に華咲けるか、今ハ跡かたもなくなりぬ、此門前の太鼓橋は、文政の末頃市中にて寄進す

鐵門海が来盛した文政年間（一八一八～三〇）の末ごろに、城下の信者が明王院の門前に太鼓橋を寄進したという。鐵門海の来盛以降、同院に対する信仰が隆盛したことになる。

「篤焉家訓」中の書上には、明王院に続いて、同院の末寺・支配寺院である一五か寺およびその在所が書き上げられる（図1）。これらの存在は、鐵門海来盛以前から、藩領内に湯殿山行人が存在し、出羽三山修験道とその信仰が定着していたことを示している。その分布は、とくに盛岡を含む岩手郡以南の紫波・稗貫・和賀郡内に濃く、一方で鹿角郡、および閉伊郡のうち中閉伊・下閉伊地方には一か寺も見えない。また、領内を南北に縦貫する奥州街道の沿線、あるいは、奥州街道から東西へと

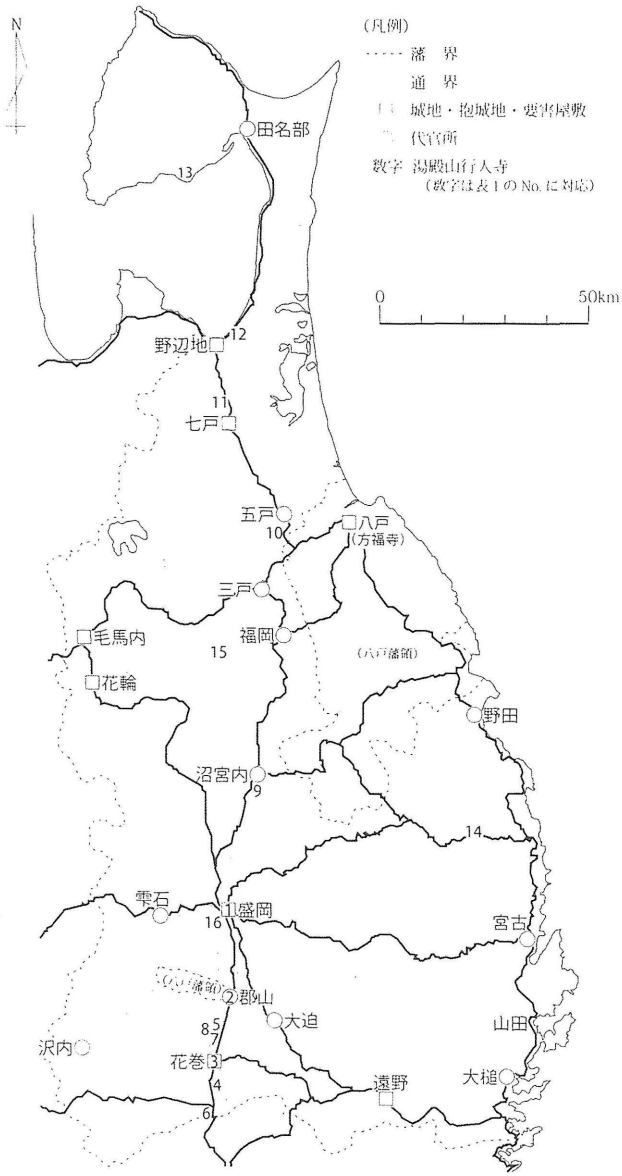

図1　盛岡藩領の湯殿山行人寺
（清水克志作図を基図とし，表1により加除修正して作成）

街道が分岐する追分付近に立地するものが多く、そのほとんどが盛岡藩で通と呼ばれる地方支配の拠点である抱城・要害屋敷・代官所のある町・村とその周辺にある[12]。つまり、行人寺は、藩の地方支配および交通上の要地に所在しており、これらの在所から周辺地域へと布教を拡げやすい場所を選んで建立されたことがうかがえる。

安政二年（一八五五）正月「御領内寺院鑑」[13]にも行人寺が書き上げられているが、「篤焉家訓」に記されていた正蓮寺が見えない。正蓮寺は、それ以前に廃寺になったと見られる。その他の行人寺についても、維新以降の寺院明細帳などに名称が見えるのは、花巻四日町の自性院のみであり、この地域の出羽三山修験道が幕末維新期に大きな変動を迎えたことがうかがえる。

この自性院は、明治三年（一八七〇）一〇月「諸宗本末・寺号其外明細帳（盛岡県）」[14]には、住職が大海で、真言宗古義派・注連寺末として書き上げられている。ただし、明王院の廃寺により、本寺は注連寺に改められている。また、同二二年（一八八九）調べの「岩手県管内社寺明細帳」（抄写本）[15]には、次のような由緒が掲げられている。

開祖運了、貞観二年小瀬川村ニ建立、十二世貞海ノ時、湯殿山注連寺末ニ相成、山号・院号及海号ヲ得免許、卅四世順海ノ時、寛永十二年三月、当地ニ引移リ、四十二世応海ノ時、天明年中凶歳ノ頃、無住ニ相成、其後、湯殿山行人鉄門上人ノ弟子、四十三世木喰行人門海ノ時、文政六年ニ再建仕、四十八世光海迄、難有寺務相続罷在候

この由緒を既述した事実と照らし合わせて解釈すれば、以下の通りとなる。自性院は、貞観二年（八六〇）に小瀬川村に建立されたと伝えられる。後に注連寺系の湯殿山行人に感化され、その門流に連なった。花巻城下の整備にともない、順海が住持していた寛永一二年（一六三五）に同地へ移った。しかし、天明飢饉のころ、第四二世応海が没すると、無住となった。続いて第四三世となったのは鐵門海の弟子門海で、文政六年（一八二三）に堂宇が再建され、以後、相続されて現在に至った。

この由緒を信頼するならば、自性院において、湯殿山行人の活動は天明年間（一七八一～八九）ごろに衰退したことになる。それは、筆者[16]がこれまでに検討した信濃・越後両国の事例とも符合する現象である。出羽三山信仰圏の縁辺部においては、一八世紀後半に信仰が弱体化する傾向にあり、盛岡藩領の場合もその例に漏れなかったのである。

ただし、このような傾向は、自性院、あるいは行人寺のみに留まらない。盛岡藩家老席日誌である「雑書」[17]文化八年（一八一一）五月二三日条には、寺社奉行の口達書による申渡しとして、盛岡城下の「真言七ヶ寺」に無住寺院があり、「無住勝」ちとなっては時々の御用に差し支え

るので、後住を早く据えるようにとの沙汰が記されている。これ以前に各種の祈禱を担ってきた寺院が機能不全に陥っていたことがうかがえる。先述した明王院の場合も、「雑書」文化九年（一八一二）三月二八日条に無住であることが見え、後住が決まるまでは、既述した末寺である花巻北湯口村の宝樹庵、同二子村の雲樹庵、沼宮内通の正乗院、五戸浅水の来福院（十海寺）が寺役を勤めることを寺社奉行に願い出て申し渡されている。なお、明王院の無住状態は、同年四月一二日の宝樹庵住持福寿海への看主任命によって解消されている。

このような状況下に来盛し、活動したのが鐵門海およびその弟子たちであった。文政三年に盛岡および山田で布教した鐵門海は、弟子門海を、無住となっていた自性院の住持とし、同六年に再興させた。機能不全となっていた行人寺を再建したことは、まさにその機能を享受する信者の獲得につながり、講中を再編させていくことにつながる。

このように、鐵門海が来盛する以前にも、注連寺系の湯殿山行人が存在した。しかし、一八世紀後半までに湯殿山行人は振るわぬ情況となり、そこへ鐵門海が来盛したのである。鐵門海は、無住の行人寺を中興するさいにも寄与し、とくに花巻四日町の自性院の住持として弟子門海を置いた。盛岡藩領における湯殿山行人の活動を再建し、次の時代に継続させる「礎」を構築したのが、まさに鐵門海であった。

第三節　鐵門海の布教活動形態

鐵門海の布教活動の特徴はどこにあるのであろうか。次に、その活動形態を検討する。

ただし、布教活動に関わる直接的な文献史料は皆無に等しい。そこで大きな手がかりとなるのは、その名を刻む湯殿山供養塔であり、それらの分布や銘文を史料とするしかない。ところが、盛岡藩領から仙台藩領へと続く陸中海岸の石仏を概観した小島俊一[18]の指摘によれば、山田町に既述した湯殿山供養塔があり、これは鐵門海の指導を強く感じるものとして挙げることができるものの、鐵門海の名を刻む湯殿山供養塔としては陸中沿岸においては唯一のものであるという。実際に、鐵門海の湯殿山供養塔は盛岡藩領においては分布が薄く、管見の限りでは四基が確認できるのみである。以下、このわずかな手がかりから検討してみることにする。

四基のうち三基は、二戸市内（旧二戸郡）に集中する（図2）。岩鼻通明[19]・滝尻善英[20]によれば、次の三基である。

①福岡町・九戸城趾松の丸

年紀は文化九年（一八一二）正月吉日。銘に「二千日山籠木食行者鐵門海」、「四十八日寒行」。

②福岡町・愛宕山神社石段下（向井栄次郎家宅地内）

年紀は壬申（文化九年）。銘に「二千日山籠木食鐵門海」、祈禱内容である「福岡町岩屋・川亦・横丁・田町安全」。なお、この供養塔は、文政四年（一八二一）に弘前藩主を襲撃しようとした相馬大作の息子が出家し、普門庵という草庵をあんで管理していたと伝える。

③堀野村・武内神社境内

年紀は文化九壬申。銘に「二千日山籠木食鐵門海」。また、「四十八日」とあり、①と同様に四十八日寒行を行ったことを記すものと推定できる。

①は、これにはじめて注目した岩鼻の指摘によれば、鐵門海の名を刻む供養塔としては、出羽庄内地方の供養塔と比べても、早い時期に建てられた塔の一つとなる。しかし、その筆跡は鐵門海のそれとは異なるという。しかも、鐵門海が二千日山籠を達成したのは文化一四年（一八一七）ごろと見られ、二千日には満たない時期であるのに、二千日山籠と記されている。これらの碑は当該時期のものに追刻されたか、あるいは後年になって建立ないし再建されたものと考えるしかない。仮に後年になってから建立されたものであるとしても、町・村を超え、三基もの塔が存在しており、いずれも文化九年に布教が実際に行われたことを記念して建てられた供養塔と見て瑕疵はないだろう。

①・②の建つ福岡町は、馬淵川中流地域の河岸段丘右側に位置し、南部信直が福岡城（旧九戸城）を本拠とした後に整備された城下町で、同

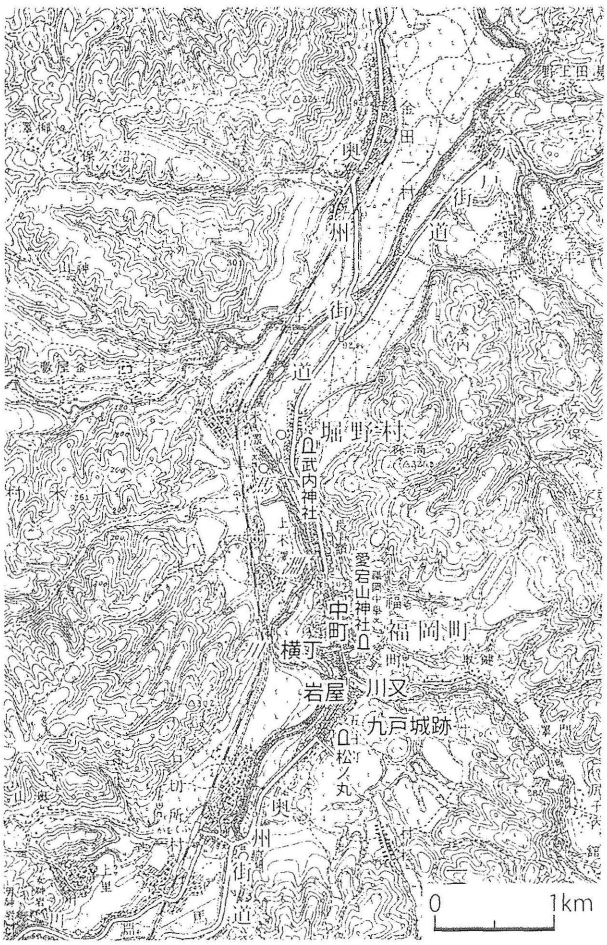

図２　福岡町とその周辺の景観（文化９年（1812））
（５万分１地形図「一戸」（1914 年）を基図として作成）

城の寛永一九年（一八四二）廃城後には奥州街道の宿場町として発展した。福岡通代官所、および藩の役人である街道奉行・植付漆奉行が置かれ、町内には給人の屋敷地も存在した。また、③の建つ堀野村は、福岡町の北側に位置する村である。奥州街道は、この北側にある追分から八戸街道を分岐する。福岡町とその周辺は、まさに支配・交通上の要地にあたる地域である。

銘にある四十八日寒行は、正月中に結願したものと読める。これを理解するさいには、出羽酒田の海向寺で行われていた、一二月の小寒の入りから正月の立春前日までの三十日寒行が参考になるだろう。三十日寒行は、朝晩水垢離をとり、町・村を一軒ずつ托鉢・勧進して歩くもので、最低三年間続けると、年占行事の神憑けになることができたという修行である[21]。福岡町での寒行も、前年末から実践され、信者の家々を廻り、その要望に応じて祈禱したものと見られる。鐵門海は、福岡町とその周辺で実践的に当該地域の住人の安全祈禱を行っていたことになる。②の福岡町については、商人・百姓が集住する横丁・田町に加え、岩屋・川又という盛岡藩の給人が集住する屋敷地が含まれている[22]。鐵門海の信者が、武家から商人・百姓まで、身分を超えて集結していたことがうかがえる。

もう一つ注目すべきは、堀野村の③の供養塔が建立される地である。武内神社（武内大明神）は当時、羽黒派の大泉坊を別当とした神社である。鐵門海の布教活動は、羽黒派・行人派など宗派を超えて活動されていたことになる。

このように、文化九年の湯殿山供養塔三基からは、鐵門海が福岡町を中心に四十八日寒行を実践しつつ、周辺地域にまで信者を拡げ、しかも武家や当該地域の羽黒派までも巻き込みながら活動していたことがうかがえる。文化九年という時期は、鐵門海にとっては、住持する酒田の海向寺本堂を再建するべく勧化を行っていた時期である[23]。この寒行をともなう布教活動も、その勧化と関わる可能性がある。また、海向寺の本堂は、これらの供養塔の年紀から二年後の文化一一年（一八一四）七月に上棟されたが、その棟札には、鐵門海の弟子として「南部森岡　南補海」の名も書き上げられている。既述した弟子門海を花巻四日市自性院の住持とする以前にも、鐵門海は、布教後直ちに盛岡藩領へ弟子を常駐させ、信者に対する手当をしていたことがうかがえる。このことは、盛岡藩領が鐵門海にとって重要な講中の所在地であったことを示唆する。

もう一つの湯殿山供養塔は、既述した山田町のものである（図3）。山田町は、山田湾の湾岸に位置し、盛岡藩大槌通に属する下山田・飯岡両村内に形成される港町で、陸中海岸を宮古町から大槌町へと南北に貫く閉伊街道（浜街道）の宿場町でもあり、文字通り交通の要地であった。上・下山田村には関口川が東側の太平洋に向かって貫流しているが、その中流部、上山田村内に、に上・下山田村・飯岡村三か村の元来の集落と伝える関口があり、また河口までの中間に、天正年間（一五七三～九二）ごろに武藤助五郎頼衡が開拓したとも伝えられる関谷の集落もある。

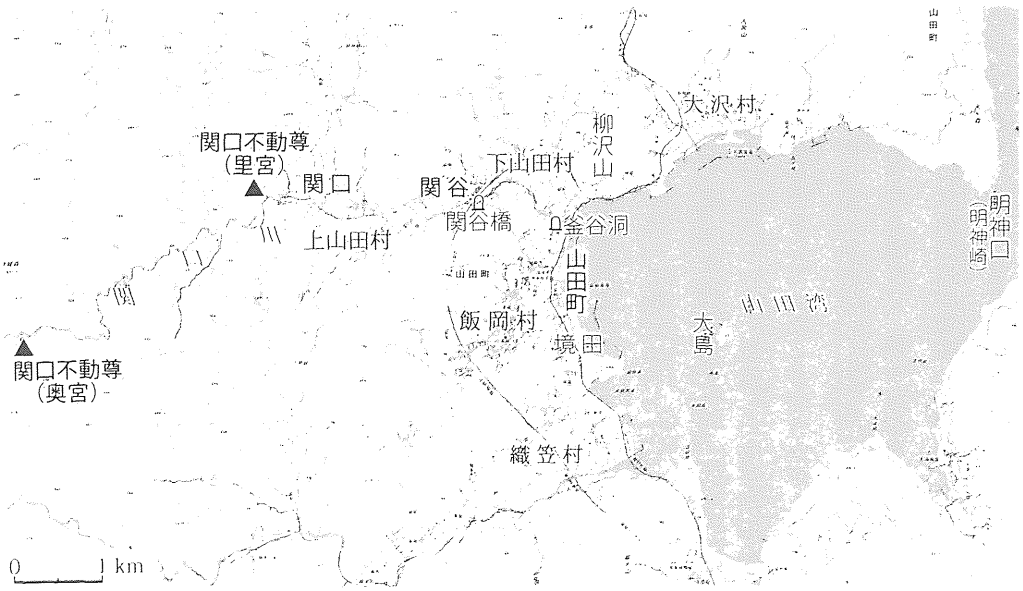

図３　山田町とその周辺の景観（文政年間（1818 ～ 30））
（電子地形図 25000（2014 年）を基図として作成）

その関口川が太平洋へと流れ込む南岸一帯は釜谷洞（現在は北浜町の一部）と呼ばれる。釜谷洞にある山田上水道山田水源地施設の西南角および道路向いに、釜谷洞古碑群と呼ばれる塔碑群がある[24]。ここで取り上げている鐵門海の湯殿山供養塔はその塔碑群中の一基である。この塔碑群には、山田町の人々が建立した安永七年（一七七八）・文化五年（一八〇八）五月・文政七年（一八二四）二月一二日および年号未詳の庚申塔、嘉永四年（一八五一）の梵字供養塔、慶応二年（一八六六）正月および年号未詳の岩鷲山・早池峰山・志和稲荷碑、明治一〇年（一八七七）五月湯殿山・月山・羽黒山碑などがある。これらが建つ南側には、山田町の鎮守の一つである大杉神社がある。これらの神社や塔碑群を建立したのは、上・下山田村・飯岡村（山田町・関口・関谷を含む）の商人・百姓たちである。鐵門海の名を刻む湯殿山供養塔の場合も、塔に記載される「郷中」がこれらの人々で、彼らの手によって造立されたものと推定できる。

前節で指摘したように、閉伊郡のうち中閉伊・下閉伊地方は、行人寺が皆無である。山田町とその周辺も、既に検討した福岡町周辺と同じように、羽黒派が元来、活動していた場である。天保一二年（一八四一）五月二九日に没した大梅こと小島筠の詩文を収める「大梅居士文集」[25]には、天保癸巳、すなわち天保四年（一八三三）に小島が釜谷洞にあった豪商貫堂卓堂（笹屋）の別邸（松堡里山荘）を訪れたさい、この町では「注連引はえて誦経の声いかめしく、鈴の音なと打ましりて事有り気に聞ゆる」とし、誦経の主は「羽黒のすけ（修験）ん者にや」と書き残されている。

ところで、山田町には、鐵門海以外にも外来の宗教者がやってきたことを記す

伝承が散見される。その一つに、柳田国男・鈴木棠三が佐々木喜善の原稿を書き改めたと言われる「遠野物語拾遺」[26]の第一〇七話や、佐々木喜善『聴耳草紙』[27]の第四六番に採録された「島の坊」伝承がある。

「島の坊」伝承は、これを検討した橘弘文[28]によれば、おおよそ次のように整理できる。天明年間に山田町に来た修験者「島の坊」が山田の漁師と争い、ついには撲殺され、その遺骸は山田の港内にある大島に埋葬された。そうしたところ、この年から不漁続きとなり、漁師は困窮した。村民は、これが撲殺された「島の坊」の祟りと恐懼し、関口川河口北側の柳沢山に祠を建てて祀った。後に漁神網場大杉の神霊を奉戴し、嘉永年間（一八四八～五四）に松堡里山荘跡へ勧請し、大杉神社として祀った。

この島の坊の伝承と鐵門海の事例とを重ね合わせて見ると、釜谷洞の関口川河口付近は、江戸時代山田町の霊場とみることができる。山田町には八幡神社があり、これが元来の鎮守という。釜谷洞は、外来の宗教・信仰を受容するさいに、新たな神仏を迎え入れる場であったとみることができる。鐵門海はそのような地域の霊場を選択し、布教したことがうかがえる。島の坊とは異なり、羽黒派や在地の宗教習俗との間に衝突した形跡がないこともその証左となるだろう。

鐵門海がこの時期に受け入れられた背景を直接に知ることができる文献史料はない。そこで、当該地域における同時期の石造物を参考にしてみる。すなわち、関口川にかかる関谷橋の袂へ文化一二年（一八一五）七月一〇日に建てられた「飢死人菩提供養」の塔である。この塔を造立したのは関谷の「村中」であり、この場は、関谷にかかわる、庚申塔・山神塔から戦没者供養塔に至るまで多様な供養塔が建てられていることから、関谷の霊場であったと見られる。この供養塔は、文化一二年に当該地域で発生した大凶作による飢饉のため餓死した人々を供養したものと見られる。この地域は文化年間にいくども凶作に見舞われていた。まさに社会不安の漂う時代であり、新たな救済者への期待が高まっていたことは想像に難くない。鐵門海は、まさにそうした時期に到来し、山田町に新たな講中を編成したのである。

このように、鐵門海の福岡・山田における布教活動の特徴は、交通上の要地で行われていたところにある。このことは第二節で見た盛岡藩領における注連寺系の湯殿山行人の在所のあり方とも共通している。鐵門海は、これまでの検討結果も含めるならば、これら湯殿山行人の活動していた場に入り、講中を編成していったと考えられる。このときまでに機能不全に陥っていた既存の宗教者に代わり、相次ぐ飢饉に憂える不安な社会に生きる人々の期待に応えていった。しかも、武家から商人・百姓に至る広範な階層からの帰依を獲得し、それまで衰退傾向にあった出羽三山信仰を再生させていったのである。しかも、その布教は、在地の霊場に頼り、在来の宗教と対立せずに行われていたとみられる。

第四節　遺弟門海の関口不動尊再興

山田町には、もう一つ、鐵門海との関わりを伝える寺社がある。関口不動尊である。関口不動尊は、維新後の神仏分離によって関口神社と改称し、国常立命を主祭神としている。関口神社には里宮と奥宮があり、奥宮は現在、関口神社と称する里宮に対し、関口不動尊とも呼称されている。以下では、それぞれ関口不動尊の奥宮・里宮と称することにする。

この関口不動尊は、文政一三年（一八三〇）に鐵門海の弟子である花巻四日町自性院の門海によって再興されたと伝えられている。そのさいには、「山籠中納所御附添世話人」として同町の池田屋徳太郎が同行している。鐵門海はその前年に没し、その遺骸は注連寺に運ばれ、土中入定を擬せられた。そして遺弟たちは一千日後に遺骸を掘り出し、即身仏として祀り、鶴岡、ついで越後村上において開帳し、鐵門海を聖人化するのである[29]。このことを念頭に置きながら、門海による関口不動尊の再興を検討する。

関口不動尊の再興については、天保二年（一八三一）に編まれた巻子状の形態をとる「再興開山」[30]と題する記録がある。以下では、この記録を用いて検討を進める。

「再興開山」では、関口不動尊の始まりが村の草創と関連させて述べられている。次に掲げる。

抑々、不動明王の由来を委敷奉尋に、村始りてよりあらわれ給ふ御神にて、諸人尊ミうやまい奉る事年久し、然に、世開ケて上・下山田・飯岡・山田町と開ケわかれて後、信心薄ク相成候ニや、飛さり給ふよし、たれ申共なく中ふらし、其後、明徳もなかりせばなかしく相成、是、別山田の根元本村なり、されば、今関口の南に当て不動カ岩と申て、今に其印有大木の桂有、いつの世にか飛さり給ふや、知る人さらになし

寛保年間（一七四一～四四）のころ、後の別当家の先祖である孫三郎が不動山の山上にあたるやつかれ松山に薪取りに出かけたさいの休息中に、大入道が現れ、「我者不動也、信心を致へし」と言ったという。孫三郎は、下山後に村の「年老」に話し、一統で相談のうえ、延享二年（一七四五）五月二八日に「御借宮（仮）」を造立した。その後、明和九年（一七七二）に新たな「御宮」を造立し、さらに寛政三年（一七九一）には、上方筋の細工仕様を見聞して「吉野山掛造り」を参考に改装した。また、享和年間（一八〇一～〇四）のころには、病人に薬効のある「御滝の御水」（金湯水）が湧き出したという。そして、門海の再興へと続くのである。

「再興開山」には、「出羽国湯殿山の行者鉄門上人の御弟子門海行者、去ル文政十二年丑ノ十二月四日、当山に御登、山籠被遊」とある。鐵門

海が出羽酒田の海向寺で入寂したのは、その四日後の一二月八日と伝えられている。鐵門海は、これに先立つ一〇月二五日に弟子へ遺言を認めており、その弟子の中に「南部森岡（盛）門海」も含まれている[31]。鐵門海は、自ら編成した広域に拡がる講中を地域ごとに分け、それぞれを弟子に託した。門海の場合は、文化九年・文政三年の布教のさいに結集した盛岡藩領の講中が分与されたと見られる。すなわち門海は、鐵門海の名代として、その布教活動を継承し、実践していたことになる。

ただし、不動尊の再興については、門海の側から始めたものではない。あくまでもその前提に、在地からの要請があったと見られる。それは、同年六月に不動尊別当三之助、その親類三之助（ママ）、別家松太、親類孫助の連名により、村方の老名六右衛門・善助・喜兵衛、組頭喜伝治・長治郎・彦右衛門・源蔵・源之助・亦兵衛・平之助、大小御寄進衆中あてに差し出された「相出（ママ）し双方書遣申一札之事」[32]が存在するからである。これは、彼らが関口・関谷の大家・小家御一統に相談のうえ、不動尊の「御馬場」へ並木杉一〇〇〇本を寄進したさいの証文である。当時、不動尊は山田町・釜谷洞・大沢村の「御信心御方様」に支えられていたという。このような不動尊を信仰する人々が再興を企図し、鐵門海の弟子である門海を招き、不動尊の再興を実現させたのである。

実際、開山中には、開山手伝僧世話役を小鎚屋多兵衛が、山中諸式台所を松本五郎兵衛が、宿諸事世話人を関口の川戸屋善助が、金銭・人足手支配世話人を関屋六右衛門・佐々木屋源兵衛・泉屋彦右衛門が、諸事御山入用物世話人を常陸屋安兵衛が、上・下山田村役世話人を肝入沢田屋勘兵衛が、山籠中留守役を湊屋金四郎が勤め、また、村の老名である善助・六右衛門・善兵衛・多左衛門・善太郎・金右衛門・長治郎・与惣治・彦蔵・与五右衛門、組頭である源兵衛・久之丞・平之助・喜伝治・又蔵・彦之丞・庄五郎・彦右衛門・藤兵衛・小太郎が参与した。施主についても、寒行三十日名代御供人を関屋六三郎が、長床入用を五ヶ村・近郷中がそれぞれ勤めている。

そもそもこれらのことを記録する「再興開山」もまた施主個人より奉納されたものであった。巻末には次の奥書がある。

天保二辛卯三月吉日敬白

此巻為末世に、奉宝納不動尊に

ありかたき山本くらき古里を

てらさせ給ふ不動明王

施主

柳沢

「再興開山」を作成して奉納したのは、施主で屋号を柳沢と称する阿部家であった。阿部家は、当時勢力を拡大し、関東と海産物の流通で財を成していた山田町の豪商である。しかも釜谷洞の大杉神社が嘉永年間に移転するまで、柳沢山において島の坊と大杉神社の祭祀を行っていた家と伝えられている(33)。外来の信仰および宗教者を受け入れ、また、門海による関口不動尊の再興を支える基盤は、このような当該期に経済力を誇った在地の商人・百姓・漁師であった。

門海による不動尊の再興は、新たな信仰の山を創出するものであった。門海は文政一二年一二月一一日から翌一三年正月一一日まで三十日間の寒行を行い、「郷中永栄繁昌・五穀成就・大漁万作」、「火水病難」からの救済を不動尊に心願した。その結果、文政一三年正月元日から鰯が豊漁となったという。また、この「心願苦行」の最中に、この山へ湯殿山の「神・諸仏」を「写し」、万民末世の人々を「修賞西道」（衆生済度）なさしむべしと、湯殿山の「御告」を受けた。これにより門海は岩山二四ヶ所を見立てて、「漁事」を祈念する竜神祭を執行し、湯殿山中に祀られる「御沢仏」を勧請することにした。そして山号を金湯山とする新たな霊山の創出を行っていったのである。

竜神祭は二月一七日に執行された。「小船を造り、色々の百三の御食を備え、五色の幣を立、花をかざり、香を焼」いた後に、「湯殿山」、すなわち釜谷洞の鐵門海の名を刻む湯殿山供養塔から出発し、山田の「大道」をねり歩いた。これは梵天を先に立て、清めの塩をふり、「五色の旗、白旗、共ニ三十一流れ」のほか、山田を在所とする宗教者である「山伏七人・神道壱人」が螺貝を吹き立て、二行に列を整えててお供した。その御旗は上・下山田郷中（二流）、山田町・大沢村の網師衆（二流）、山田町の商人昆家の母（一流）、同じく女人七名（一流）、常陸屋など商人衆四名（一流）の寄進によるものが含まれ、また、吹流旗も常陸屋ら商人や大沢村八万丸の船頭善兵衛らによるものであった。竜神祭の行列は、山田町の南端である境田まで行き、ここから船を数船、海へ繰り出し、「千巻経」を読誦しながら浦崎の明神口まで行き、早舟により竜王へ参拝させる。その後、松本家へ帰り、二〇日夜には関口の川戸善助方へ一宿する。

門海は、同日夜に川戸家へ「年老」を呼び、「御沢」、すなわち関口川に沿って神仏（御沢仏）を勧請すること、関口不動尊の「御宮」を里に下ろし、長床を設えることを提案し、賛同を得た。そのさいに、彼は、その理由を次のように説いた。

人作之山者たつ（尊）とからず、直作こそ尊き者也、其故者神代ゟ今に至而名山者生まゝのもの也、近々ハ湯殿山并ニ八聖山ヲ見るべし、何れ日本国中ニ人作者いや（卑）敷もの也、殊ニ末世物入なき当山生まゝに仕立なば、日本一の御山なるべし

表２　金湯山の御沢仏弐拾四ヶ所

御沢仏	利益	所在・祭神縁起等
胎内権現		曾谷ヶ沢
薬師の権現		大川・小川二又口の峰
荒神賀蔵大明神	衆生済度	山神の弟姫。一王子。沢辺の御前
五神仏	（地蔵菩薩）地の神。穀菩薩	
	（不動明王）我舟	
	（大日如来）目を照らす	
	（観世音）衆生済度	
	（阿弥陀如来）極楽往生	
姥権現（子安の観音）	安産守	柴か岩谷
日天・月天灯明仏	御来光信心の徳次第	
熊野権現	命の親の神	
御沢八万八千仏	悪事災難救	
五大力大聖不動明王	病煩・疫病・行事急難・水難・火難・魔除。一願のみ叶	唐格子
仙人権現		
神万大聖不動明王		
納馬大明神（馬頭観世音）		
釵野権現	険難・遭難・釵の難除	釵林
苅米鉾立新山大権現	悪魔降伏・疫神除	割沢
御蔵大黒弁財天	福徳	
護摩壇不動明王（門海護摩壇大正不動明王）		
民の木立濁沢大正不動明王		
十万八千仏		
行者八大金剛童子（御山野開山門海金剛童子）		平床岩
射山白飯野権現（穀菩薩）		参坪か平
秋堂口飯綱権現（稲荷大明神）	稲神・田の神・野王神。五穀成就	
天照大神		八つかれ杉（日野岡峠）
御前庚申仏（猿田彦の尊）		荒神
水神権現		金湯水

註　天保２年（1831）「再興開山」により作成。
門海は、御本社金湯山大聖不動明王（悪人・難病・難儀の筋誓願を叶う。中尊は天の岩戸）に加え、境内で、不動尊上の大石に小浦三宝荒神（悪風雨祓・海上安全守）、竜宮滝に女竜・男竜の竜神（海上安全・五穀成就）、山奥に生岩の千体仏を勧請している。

人工の山は尊くない。自然の山こそ尊い。山は元来、湯殿山や八聖山のように生けるままのものであり、この山が「生まゝ」に仕立てられるならば、「日本一の御山」になるであろう、と説く。

出羽庄内における湯殿山の御神体は、社殿をともなわない、湯が湧き出る自然石である。また、山中の各所にある霊石・霊泉は神仏と見なされ、そこに御沢仏が祀られている。それらにならえば人工の「御宮」は不要である、と説いたことになる。その場には、修験者が参籠する長床のみがあれば良いとしたのである。

こうして御沢仏は、正月二一日に各所へ勧請される（表2）。それは、商人・百姓・漁師、あるいは男女に利益する神仏と説かれる。翌二二日からは、大工・木挽・人足によって「御宮」が里に下ろされ、長床の普請が始められる。「御宮」の跡は「本の姿」、すなわち「直作」となり、岩場に御神釼、玉垣、その前庭に長床が仕上げられる。御神釼は、松本五郎兵衛と郷中（上・下山田村、飯岡村）によって、八尺五寸のものが一本、六尺五寸のものが二本用意された。石造の玉垣は、五郎兵衛の縁者とみられる松本宗平をはじめとする山田町の廻船問屋衆や海産物商人衆、念仏女中によって寄進された。松本宗平は「金湯山」の額二枚も奉納した。奥宮は、まさに山田町の経済力によって、荘厳された。

門海は、二月一日から二一日まで三七日御護摩を執行する。翌二二日に「開山」された不動山で、「御清」として明け六つから七つまで護摩を執行する。下山したのは三月三日である。

こうして関口不動尊を祀る金湯山が開かれた。門海は、湯殿山の信仰を金湯山へ文字通り写した。しかし、湯殿山が女人禁制を採るのに対し、金湯山は女人の登山も許可していた。「再興開山」には次のように記されている。

女人可為禁制事ニ候得共、当山者先年より男女御めんの御山故、御ゆるし被成候、湯殿山江参詣同様なり、御信心の方々者大願成就無疑、尤、参詣之面々馬足者御山の入口より御無用に可被成筈

馬を山中に入れることは禁じられていたものの、男女ともに、金湯山に参詣するならば、湯殿山へ参詣するのと同じ功徳が得られると説かれ、信心する人々の大願成就は疑いなしと唱われた。金湯山は、湯殿山への信仰を基礎としつつも、女性の信仰をも享受する存在として位置付けられた。

このことからも、金湯山は、「写し」とはいえ、決して湯殿山の形態そのままでないことも確かである。ここでは、勧請された御沢仏を例にしてみたい（前掲表2）。御沢仏には、行人寺で執行される湯殿山法楽に現れる神仏が見受けられるし、出羽三山に特徴的な習合神である御歳

大黒弁財天なども含まれており、一見すると、湯殿山の御沢仏信仰がそのまま「写」されたように見える。しかし、御沢仏の構成は、厳密には湯殿山のものとは異なり、若干の変更が見受けられる。御沢仏は、門海と同じく鐵門海の弟子が住持を勤めた越後岩船郡塩谷町（現 新潟県村上市）の円福寺の堂内にも祀られているが、これも湯殿山のものとは構成が一致しない。円福寺の御沢仏を紹介した伊藤武[34]は、その理由を、地域の信仰に合わせたためと指摘する。関口不動尊の場合にも、御沢仏は、信心する地域の情況を鑑み、勧請されたものと推測される。

御神釼が祀られているのも、三陸海岸の寺社にしばしば見受けられる光景である。現在、関口神社の奥宮・里宮には、門海の再興以降、現在までに数多くの御神釼が奉納されており、その寄進者も、北は宮古市、南は釜石市の講中や個人へと拡っている。

さらに、竜神祭における行列と船による明神口参拝の形態は、現在、同所で行われている八幡神社・大杉神社の例大祭や、大沢・豊間根・大浦・宮古など周辺の神社祭礼に見られる海上渡御に酷似する[35]。

門海が執行した関口不動尊再興のための諸神事や奉納の形態は、決して独自のものではなく、山田町周辺に広く行われる在地の宗教習俗を参考にし、応用したものであった。そのために、漁師や商人など多くの人々が竜神祭の行列に加わり、また、宗派を超えて羽黒派の修験や神道者の参加を仰ぐことも可能になったと推測できる。

金湯山の創出を果たした門海が其の後に関口不動尊の祭祀に関わった痕跡は、今のところ見出せない。代わって不動尊の祭祀を取り仕切ったのは関谷の羽黒派修験である智恩院（法賢坊）であった。維新期の神仏分離時には帰農し、以降もその末裔である佐藤家が司掌・宮司を務めてきた[36]。

このように、鐵門海の盛岡藩領における布教活動は、その威光を擁する門海に引き継がれ、最終的な到達点として、関口不動尊の再興へと至ったのである。それは、湯殿山への信仰を基盤とした写しとして実行され、これに在地の宗教習俗を応用することによって金湯山という新たな出羽三山修験道の地域拠点を形成するものであった。出羽三山修験道に新たな息吹を与えたのが鐵門海とその遺弟であったのである。

おわりに

以上のように、小稿では、盛岡藩領における鐵門海の活動形態を、その弟子門海の活動も視野に入れながら解明してきた。

盛岡藩領においては、すでに注連寺系の湯殿山行人がその支配・交通の要地に行人寺を設けて活動していたが、天明年間までに衰退しつつあった。鐵門海は、少なくとも文化八～九年・文政三年の二度、この地へ到来してそれらの行人寺を再建しつつ布教し、それまで信仰が薄かったと見られる下閉伊地方の山田町へも信者を拡げ、講中を再編した。建立された湯殿山供養塔は越後などとは異なって建立数がわずかであるが、それらの銘を見ると、その講中は武家から商人・百姓に至る広範な階層から成っていたことがうかがえる。その活動は、花巻四日町自性院住持とされた遺弟門海に引き継がれ、在地からの要請に応えつつ、文政一三年に山田町の関口不動尊を再興させていく。これは、金湯山という、湯殿山信仰に基づく出羽三山修験道の地域拠点を創出するものでもあった。鐵門海、そして門海の活動をみると、在地の宗教者と対立した形跡はなく、むしろ在地の宗教習俗を取り入れ、かつ、在地で経済力を有する商人・百姓・漁師の支持を得ていた。鐵門海とその弟子たちによる布教活動は、まさに出羽三山修験道の変革そのものであったのである。

しかし、その展開は一度、幕末維新期に断ち切られた。神仏分離・修験道廃止令によって本寺である注連寺が他の真言系の別当寺とともに打撃を受けたためである。天台系の羽黒山の修験が還俗して神職となったのに対し、注連寺らは真言宗の僧侶として存続することを選択する。羽黒山は、出羽神社と唱え、かつて注連寺らが有していた湯殿山の祭祀権も獲得してしまう。こうした混乱のなかで、旧盛岡藩領内の行人寺の多くが廃寺となり、講中も一旦は衰えていく。注連寺は、金剛珠院・連正寺を旧盛岡城下に創立し、講中の再編を図る。

この旧盛岡藩領の講中は、その後に大きな役割を果たすことになる。注連寺は、湯殿山の祭祀権を取り戻すべく、たびたび訴願した。それは、地方改良運動期に差しかかる明治四〇年（一九〇七）にも行われた。一一月二〇日には「国幣小社湯殿山神社独立別祭請願書」を山形県を経由して内務省へ提出しようとするが、そのさいに「添付書類」が添えられた[37]。これは注連寺側の渡部則和他二名に加え、岩手県を中心とする二一二五名が連印したものであった。当時の内務大臣は原敬であり、その立憲政友会を支える政治的地盤こそが盛岡市を中心とする岩手県であった。それは正しく鐵門海が生み出し、育て上げた旧盛岡藩領の講中の後裔にほかならない。鐵門海は、小稿で明らかにしてきたように、地域社会と積極的に接触し、講中というネットワークを組織し、彼らが有する宗教習俗や実情を知識として獲得したうえで、さらなる布教・祈禱という実践を行い、出羽三山修験道の変革を成し遂げた。その実践の結果である盛岡藩領の講中は、日本近代を支え、動かそうとする主体的な地域社会の礎と見通すことができるだろう。その明証を今後の課題としなければなるまい。

註

(1) 拙稿「一九世紀初頭出羽三山修験の覚醒運動―湯殿山・木食行者鐵門海の越後布教を中心に―」(『社会文化史学』五二、二〇〇九年。以下、拙稿①と略す)。同「湯殿山山籠木食行者鐵門海の勧化における結縁の形態―酒田海向寺住持期を中心に―」(地方史研究協議会編『出羽庄内の風土と歴史像』、雄山閣出版、二〇一二年。以下、拙稿②と略す)。

(2) 小島俊一『続陸中海岸の石仏』(熊谷印刷出版部、一九八六年)。岩鼻通明「信夫山の即身仏と九戸城の鉄門海碑」(『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』、名著出版、一九九二年。初出は一九八八年)。滝尻善英『にのへの心―二戸市制二〇周年記念誌―』(二戸市教育委員会、一九九一年)。

(3) 熊谷章一編『花巻市史』寺院篇(花巻市教育委員会、一九六二年)。渡部留治編『朝日村誌』一 湯殿山(朝日村役場、一九六四年)。

(4) 前掲註(3)渡部編著書。

(5) 盛岡市仏教会編『盛岡の寺院』(盛岡市仏教会、一九九五年)。外内英子編『いわてのお寺さん―盛岡とその周辺』(テレビ岩手、二〇〇三年)。

(6) テレビ岩手編『いわてのお寺さん―盛岡とその周辺―』(テレビ岩手事業部、一九七五年)。前掲註(5)外内編著書は本書の改訂新版である。

(7) 湯殿山供養塔は、東日本大震災により倒れたままで、背面を確認できない(平成二六年九月九日現在)。そのため、背面については、山形県酒田市海向寺住職伊藤隆文氏から借覧した震災以前の写真(山田町教育委員会撮影)を使用して判読した。

(8) 前掲註(1)拙稿①。

(9) 森毅『修験道霞職の史的研究』(名著出版、一九八九年)。

(10) 青森県史編さん近世部会編『青森県史』資料編近世四(青森県、二〇〇三年)。以下同様。

(11) 南部叢書刊行会編『南部叢書』一(南部叢書刊行会、一九二七年)。

(12) 盛岡藩の地方支配については、浪川健治編『近世の空間構造と支配―盛岡藩にみる地方知行制の世界―』(東洋書院、二〇〇九年)参照。

(13) 前掲註(3)熊谷編著書。

(14) 「社寺取調類纂」(国立国会図書館所蔵)。雄松堂書店刊行マイクロフィルムに拠る。

(15) 岩手県立図書館所蔵（新渡戸文庫旧蔵）。
(16) 拙稿「一八世紀信濃国における出羽三山修験の存在形態―佐久郡内の湯殿山行人を中心に―」（『信濃』六一―三、二〇〇九年）。
(17) 雄松堂書店刊行マイクロフィルムに拠る。
(18) 前掲註(2)小島著書。
(19) 前掲註(2)岩鼻論文。以下同様。
(20) 前掲註(2)滝尻著書。
(21) 堀一郎「一世行人と年占の神つけ」（『宗教・習俗の生活規制』日本宗教史研究Ⅱ、未来社、一九六三年。初出は一九六二年）。
(22) 鈴木宏・下斗米昭「近世」（二戸市史編さん委員会編『二戸市史』二近世・近代・現代、二戸市、二〇〇一年）。
(23) 前掲註(1)拙稿②。
(24) 山田町史編纂委員会編『山田町史』上巻（山田町教育委員会、一九八一年）。なお、これらの塔碑には、鐵門海の湯殿山供養塔と同様に、東日本大震災によって転倒したものがあり（平成二六年九月九日現在）、すべてを判読できなかった。
(25) 南部叢書刊行会編『南部叢書』一〇（南部叢書刊行会、一九二九年）。
(26) 柳田国男『柳田国男全集』二（筑摩書房、一九九七年）。初出は一九三五年。
(27) 佐々木喜善『聴耳草紙』（筑摩書房、一九九三年）。初出は一九三一年。
(28) 橘弘文「神になった無法者―岩手県下閉伊郡山田町の島の坊伝説をめぐって―」（『大阪明浄大学紀要』六、二〇〇六年）。
(29) 前掲註(1)拙稿①。
(30) 山田町教育委員会提供の写真版に拠る。以下同様。
(31) 海向寺清海記録帳（山形県東田川郡三川町成田新田 町野甚十郎家文書）。海向寺所蔵写真版に拠る。なお、遺言書の弟子のなかには「南部門海弟子 学竜海」の名前も見える。
(32) 小林喜代治『関口不動尊開山考』（私家版、刊行年未詳）。
(33) 前掲註(28)橘論文。

(34) 伊藤武『出羽三山―開山一四〇〇年記念―』（みちのく書房、一九九六年）。

(35) 鈴木弘一『漁民と信仰―大沢と七籠り―』（山田町教育委員会、一九九一年）。宮古市教育委員会編『宮古市史』民俗編（宮古市、一九九四年）。川島秀一『漁撈伝承』（法政大学出版局、二〇〇三年）。大島建彦「八幡祭りと大杉祭り―岩手県下閉伊郡山田町―」（『アンバ大杉の祭り』、岩田書院、二〇〇五年。初出は二〇〇四年）。

(36) 山田町史編纂委員会編『山田町史』中巻（山田町教育委員会、一九九七年）。

(37) 前掲註(2)渡部編著書。ただし、この訴状・添付書類は、山形県が内務省に送達しないままとなった。

（付記）　山田町での現地調査は、平成二六年（二〇一四）八月・九月の二度にわたり実施した。四年越しの念願が叶った調査であったが、東日本大震災による被災地の現実を目の当たりとする機会ともなった。調査中には、本文で言及した大杉神社が、被災した釜谷洞の地から、柳沢山の旧地に新造された元宮へ遷座され、八月三日には復興された神輿のお披露目、九月一五日には例大祭における神輿海上渡御の四年ぶりの斎行という、希望に満ちた話題にも接することができた。震災で犠牲になられた方々の御冥福とともに、復興のさらなる進展を祈って止まない。

執筆にあたり、山田町教育委員会生涯学習課文化係長川向聖子氏、筑波大学人文社会系教授浪川健治先生、芸術系准教授松井敏也先生、山形県酒田市海向寺住職伊藤隆文氏をはじめ多くの方々から史料の提供ならびに御助言をいただいた。記してお礼申し上げる。

小稿は、平成二五年度公益財団法人稲盛財団から研究助成の恩恵を受けた研究課題「変革期における知識・思想・実践の交錯と創造」の成果の一部である。